
~ 双剣覚醒発売記念企画 ~ バカとイメージと先導者 V S ゆるい口ウきゅーぶ

ベガF91

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『双剣覚醒発売記念企画』 バカとイメージと先導者VSゆるいロウきゅーぶ

【Nコード】

N9851Z

【作者名】

ベガF91

【あらすじ】

カードファイト！！ヴァンガード第五弾『双剣覚醒』の発売を記念して書いた小説です。コラボ企画で今現在連載中の『バカとイメージと先導者』と『ゆるいロウきゅーぶ』のコラボです。それぞれのキャラクターたちがヴァンガードファイトします。

出会い編（前書き）

14日発売のカードファイト!!ヴァンガード第五弾『双剣覚醒』の発売を記念としてコラボ小説を書き上げました。

出会い編

それはある日のことだった。七森中の生徒会副会長の杉浦綾乃は嬉しそうにスキップをしていた。同じ生徒会メンバーである池田千歳とともに倶楽部へ向かう。

いつも倶楽部は慧心学園の女子バスケット部のコーチに行くため不在だったのだが、今回はコーチはないと聞いたため来ている。

すべては京子に会うために。そして部室に着き、綾乃は勢いよく扉を開ける。

「京子お　！　……ってあれ？」

思わず間拔けた声が出てしまう。見てみると京子たちは何やら準備している様子であった。結衣とあかりは京子の指示に従ってテーブルを運んでおり、ちなつは掃除をしていた。

「ほら、そこにおいて」

「てか、京子先輩何もしてないじゃないですか」

「え？　ちょっと、何してるのよ……？」

「あ、綾乃ー」

京子が綾乃に気づく。そして綾乃は今何をやっているのか京子たちちに聞いてみる。

「いったい何してるのよ。てかそのテーブルはなんなのよ」

「あー。それはその意味を知るためにあるんだよ」

「いや、そういう哲学的な答えを期待しているんじゃないと思う」

「すみません、遅れました」

ここで智花たち慧心学園の女子バスケット部のメンバーが来た。

「あ、来た来た」

「え？ 智花ちゃんたち。どうして？」

「みんなは持つてきたかな？」

「「「「はい」」」」」

京子の質問に答えるかのように何やらカードのデッキケースみたいなものを京子たちに見せる。しかし、そのカードゲームを知らない綾乃は戸惑ってしまう。

「え！？ それ何？」

「あー。ヴァンガードや」

「へ？ ヴァンガード……？」

千歳は知っているようで綾乃は知らない様子。すると、千歳のポケットからデッキケースが出てくる。

「うちもやってるんやで」

「え？ 千歳もって……、京子たちもやってるの？」

「うん。ほら」

京子たちもヴァンガードのデッキケースを取りだし綾乃に見せる。しかし、綾乃は全く知らないためかますます戸惑うばかりである。

「ちょっと！ なんなの！？ ヴァンガードって！」

「何ってカードゲームだけど」

「だからー！」

「あの一、七森中の倶楽部ってここですか？」

すると、今度は別の学校の制服を着た生徒たちがやってくる。

「え？ 誰なの、あなたたち……？」

「おー。あきりんたち、待ってたよー」

「やあ、歳納さん……ってその呼び名はやめてって言ってるじゃん」

「まあまあ」

あきりんと呼ばれるその人物は茶髪に少し女性に見える顔立ちをした少年、吉井明久で他にもいろいろ個性豊かな人たちが14人いた。

すると、その制服を見た綾乃は思わずびっくりしてしまふ。

「てか、その制服って文月学園の生徒たちじゃないの！」

「うん」

「明久君、この人たちが前話してた人たちなの？」

青い髪で可愛い容姿をした少年（？）、先導アイチが明久に声をかける。

「うん。アイチ、この子たちが前話した七森中の倶楽部と慧心学園の女子バスケットだよ」

「いかにも、私が倶楽部の部長にして、この中学で一番の美少女、歳納京子だよん」

「いつから美少女になったんだ？」

「もう、ひどいなー。ゆいちゃんは」

京子の自己紹介をした後、他のみんなもそれぞれ自己紹介をしていく。

「船見結衣です」

「赤座あかりです。京子ちゃんと結衣ちゃんとはひとつ年下の中学1年生です」

「あかりちゃんと同じく、吉川ちなつです」

「け、慧心学園初等部、湊智花です」

「同じく、三沢真帆です」

「永塚紗季です」

「か、香椎愛莉……です」

「ひなた、袴田ひなた」

七森中の娯楽部と慧心学園の紹介が済んだところで今度はアイチたちの出番となる。

「僕は先導アイチです」

「權トシキだ」

「戸倉ミサキ」

「俺様は葛木カムイ。小学6年生だ」

「俺は三和タイシ。權とは昔からの親友さ」

「俺は森川カツミ！ アイチは俺の一番弟子だ！」

「おいおい……俺は井崎ユウタ」

「先導エミです。アイチの妹です」

「私はカードキャプタルの店長、新田シンです」

「僕たちは、もう知っているから紹介しなくてもいいかな、歳納さん」

「いや待て、明久。まだ知らない奴が2人いるだろ」

赤髪に背が高く逞しい体を持つ少年、坂本雄二がまだ顔見知りの綾乃と千歳を見て明久に言う。

「あー、ゴメン。じゃあ紹介するね。僕は吉井明久」

「俺は坂本雄二」

「姫路瑞希です」

「ワシは木下秀吉じゃ」

「……………土屋康太」

自分たちの自己紹介が終わると今度は綾乃たちも紹介していく。

「わ、私は杉浦綾乃。この中学校の生徒会副会長をしています……………」

「うちは池田千歳。綾乃ちゃんと同じく生徒会メンバーやで」

「よろしく、杉浦さん、池田さん」

「ここでようやく本題に入ると綾乃が京子に聞いてみることに。」

「それで、智花ちゃんたちはともかく、なんでこの人達もこの部室

に来てるわけ……?」

「あー、綾乃ちゃん聞いておらんかったっけ?」

「何を?」

「実は、1月14日に発売する、ヴァンガード第五弾『双剣覚醒』の発売を記念として別の小説の人たちとヴァンガードファイトするんだよ」

「それで、生徒会にはそのことを言ったんだけど……京子、綾乃には言わなかったのか?」

「いやー、その時、綾乃は風邪で休んでたじゃん」

「な、なんでそういうことを早く言わないのよ!」

「せっかくだから、綾乃にびっくりさせようと思って内緒にしてたんだー。まさしくサプライズヴァンガード」

「そんなサプライズ、いらないナイアガラよ!」

「ぶはっ!」

綾乃の駄洒落に結衣は思わず笑ってしまう。すると、ここである二人の人物がここにやってきた。

「先輩、まだ倶楽部に……って智花ちゃんたちとその人たちは……」

「あら、文月学園の生徒ですわね」

生徒会メンバーである大室櫻子と古谷向日葵である。

「あ、櫻子ちゃんと向日葵ちゃん」

「ねえ、これ何が始まるの?」

「こんな大人数で何をするつもりなのですか?」

どういづことが京子は櫻子と向日葵にも説明する。

「あー、ヴァンガードですか!」

「この前、櫻子とやったあれですか」

「ええ!? 大室さんと古谷さんもやってるの!?!」

ヴァンガードを知らないのは綾乃ただ一人であった。それは置いておき、さっそく発売記念企画のことを京子が話す。

「さてさて、全員集まったところでヴァンガード第五弾『双剣覚醒』発売記念対決やっちゃうよー!」

「うおー! 待ってたよ、きょーたん!」

「おー」

「それでどじするの?」

ミサキが京子にルールの方を聞いてみる。

「よく聞いてくれました、ミサキーヌ」

「変なあだ名つけるな！」

「まず、くじ引きを引いて、自分と同じ番号と一緒に人とヴァンガードファイトする。どちらのチームにはこの抽選BOXから一枚引いてもらうよ」

京子はいつもくじ引きで使っている赤い箱ともう一つ青い箱を取り出す。

「私たちはこの赤い箱を。文月学園のみんなはこの青い箱からくじ引きしてもらうよ」

「なるほどね」

「それで同じ番号の子とヴァンガードファイトをするよ」

「あ、あの……そこは私が司会するんじゃない……。一応、そのために呼ばれているんですよ。てか、京子ちゃんもこのバトルに参加しますよね……？」

店長が京子にそんなことを言うが、京子はお構いなしに進めてしまおう。

「いいいいの。シンシンにはあとでバトルの進行をしてもらうから」

「そ、そのあだ名で呼ばないでください……」

「じゃあ、引いてって」

このバトルに参加するみんな、箱からそれぞれ一枚ずつくじを引いていく。もちろん、京子も引いていった。そして、ようやく司会進行の座を京子からもらえた店長がしきる。

「みなさん、引きましたか？ それじゃあ、開いてください」

みんなくじを開いていき、対戦相手と順番が決まった。

第一回戦 木下秀吉 VS 香椎愛莉

第二回戦 坂本雄二 VS 袴田ひなた

第三回戦 土屋康太 VS 三沢真帆

第四回戦 姫路瑞希 VS 永塚紗季

第五回戦 吉井明久 VS 湊智花

第六回戦 葛木カムイ VS 吉川ちなつ

第七回戦 戸倉ミサキ VS 歳納京子

第八回戦 權トシキ VS 赤座あかり

第九回戦 先導アイチ VS 船見結衣

「ワシは香椎との対戦じゃな」

「俺は袴田か。楽勝だぜ」

「よし、負けないぞ。ツッチーニ！」

「……………あだ名はムツツリーニだが」

「ふふ、私の相手は姫路さんですね」

「お手柔らかにお願いします。紗季ちゃん」

「僕は智花ちゃんだね」

「吉井さんには負けませんよ」

「俺たち、チームQ4は後半ですね。お兄さん」

「うん」

「なんでよりもよって……………」

「よろしくね、ミサキーヌ」

「だから、変なあだ名で呼ぶな！」

「あ、あかりはなんか強そうな人と当たっちゃったよ……………」

「大丈夫よ、あかりちゃん。見た目だけだと思うよ」

「私は先導アイチ君と対戦か」

そんなみんなも燃える中、それ以外の人は全員見学である。三和と綾乃が会話を始める。

「あなたたちも見学なの？」

「ああ。それより、京子ちゃんたちって強いのか？」

「わ、私はやったことないし、それに京子たちがヴァンガードをやっているなんて初めて知ったし……」

「そっか」

「エミちゃんだっけ。アイチ君って強いのか？」

「はい。アイチは今まで全国大会に行ったことありますので」

「全国……すごいねー」

「櫻子にはほど遠いですわね」

「なんだとー！」

いつの間にか櫻子と向日葵とエミはとても仲良くなっていた。森川と井崎は視線を向日葵に向いていた。

（おい、あれ見るよ）

（なんだよ、森川……）

森川は向日葵に指差して小声で井崎と会話している。

(あの子がどうかしたのかよ?)

(よく見てみるよ。あの子、中一とか言っていたな。それにしても胸が大きくないか?)

森川が注目していたのは向日葵の胸であった。さすがにそれを感じた井崎は呆れてしまう。

(お前な……)

(でも、すごくないか!?)

(はぁ……)

さすがに呆れる井崎。そして、千歳はあかりを応援していた。

「あかりちゃん。がんばってやー」

「あ、はい。千歳先輩」

あかりも応えて千歳に手を振る。それを見た三和は綾乃に聞いてみる。

「千歳ちゃんとあかりちゃんだけ? あの子二人仲良いな」

「あー、あの2人付き合ってるみたいですよ」

それを聞いた櫻子が三和に答える。三和は思わず驚いてしまう。

「ええ？ そうなのか？」

「わ、私だって……京子と付き合ってるわよ……」

(そういえば、この子たちって百合小説のキャラだったけな)

三和も納得したところで、店長が対戦ルールと賞品が披露される。

「では、ルールはチーム戦。どちらかが先に5勝した方が勝利です。なお、勝ったチームには、大会でもらえる全種類のPRカードが贈呈されます」

「おおおお！ パープルたん、かわええー!!」

「京子、あれもう10枚持つてるんじゃないのか？」

「何枚あれば私はそれで幸せだよー」

「まったく、京子は……」

京子の言うパープルたんとはPR第三弾のカードでなかなか手に入らないパープル・トラピーズリストである。京子は何度も参加してもうすでに10枚もある。

「それでは、第一回戦の方は前に出てください」

さっそく第一回戦でヴァンガードファイトする秀吉と愛莉はテーブルの前に出る。

「よろしく頼むぞ、香椎」

「よろしく願います」

2人はファーストヴァンガードを前に置き、デッキをシャッフルし、山札から5枚引き、引き直しをした後でじゃんけんをしてから対戦がはじまる。

「それでは、レッツイメージ、レッツヴァンガード！」

「スタンドアップ、ザ・ヴァンガード……」

次回、秀吉VS愛莉に続く。

出会い編（後書き）

次回、秀吉VS愛莉です。

2人がいったいどんなデツキを使うかお楽しみに

第一回戦 木下秀吉VS香椎愛莉(前書き)

第一回戦の始まりです。

第一回戦 木下秀吉VS香椎愛莉

ファーストヴァンガードを表に反し、秀吉と愛莉のファーストヴァンガードは秀吉はロゼンジ・メイガスで愛莉はドラゴンエッグであつた。

「オラクルシンクタンクにたちかぜや」

「えっと、それは何……？」

「クランだよ」

「くらん？」

「ユニットの所属している部隊ごと」

「要するに種族をあらわしているってことね」

「そついうこと。クランにはいろいろとあるけれど、まずは対戦を見て説明してやるよ」

綾乃は三和にクランを教わり、秀吉と愛莉のファイトを見る。

「ワシのターン、ドロー。オラクルガーディアン・ジェミニにライドしや」

秀吉はロゼンジ・メイガスからジェミニにライドし、ロゼンジ・メイガスをリアガードサークルに移動させてからターンを終える。それを見た綾乃はまた三和に聞き出す。

「ライドって何?」

「ヴァンガードとグレードが同じ、もしくは1つ上のグレードを持つユニットを手札からヴァンガードの上に1枚重ねることで、ライドフェイズに行われ、1ターンに1回しか行えないんだよ」

「つまり、ロゼンジ・メイガスは0だから1であるあのなんとかジエミニでライドできるってことね」

「そうそう」

「私のターン、ドロウ。ソニック・ノアにライド! ドラゴン・エツグはリアガードサークルに移動します」

「リアガード……?」

「ヴァンガードと共に戦うユニットで、前列の左右に1体ずつと、後列の左右・中央に1体ずつ、計5体まで登場できるんだ」

「なるほど……」

綾乃が納得しているところで愛莉が攻撃に入る。

「ドラゴン・エツグのブーストでソニック・ノアでオラクルガード
イアン・ジエミニにアタック!」

「ノーガードじゃ」

「トリガーチェック、トリガーはなしです」

アタックがヒットし、秀吉にダメージ一枚のる。

「なんか、いろいろ出てきたわね。ブーストにトリガー……」

綾乃も真剣にヴァンガードファイトを見ながらヴァンガードを知っていく。

「私のターンは終了です」

「ワシのターンじゃな。ドロ。オラクルガーディアン・ワイズマンにライドじゃ！そして、プロミス・ドーターをコールじゃ」

ワイズマンにライドされた後、プロミス・ドーターをコールする。そして攻撃に入る。

「ワイズマンでソニック・ノアにアタックじゃ」

「ノーガードです」

「トリガーチェック、ドロートリガーじゃ。+5000はプロミス・ドーターにそしてカードを一枚ドロじゃ」

カードを一枚引くと、すかさずプロミス・ドーターで攻撃に入る。

「ロゼンジ・メイガスのブースト、プロミス・ドーターでアタックじゃ。さらに、ロゼンジの効果で+3000じゃ」

「ノーガードです」

プロミス・ドーターの攻撃がヒットし、愛莉のダメージはこれで2となる。

「トリガーってカードを一枚引く効果なの？」

「せや。他にもダメージをプラスするクリティカル・トリガーやダメージ回復のヒール・トリガーに再びスタンドできるスタンド・トリガーがあるんや」

「4種類ね」

「ワシのターンは終了じゃ。終了時、ロゼンジ・メイガスは山札に戻すぞ」

「私のターン、スタンド&ドロ。餓竜メガレックスにライドします。さらに砲撃竜キャノンギアをコールします。効果でドラゴン・エッグを退却させます」

「退却？」

「敵ユニットの攻撃や能力でリアガードが倒されることや。倒されるとドロップゾーンに置かれるんや」

「じゃあ、あの効果ダメなんじゃ……」

ドラゴン・エッグを退却させるとすかさず効果を使う。

「ドラゴン・エッグのカウンター・ブラストでドロップゾーンから手札に加えます」

ドラゴン・エッグの効果でドラゴン・エッグを手札に加える。

「手札に加えた」

「それがたちかぜの戦い方や」

「よくわからないわ……」

そんな秀吉と愛莉のファイトを見て京子たちは……

「あの子、強いなー」

「そりゃあ、オラクルだからな」

「でも、愛莉ちゃんも負けてないよ」

「そうですよ、ここからが本番ですよ」

「アイリーン、がんばれー！」

みんなに応援されながら、愛莉の攻撃が入る。

「メガレックスでワイズマンにアタックします」

「ノーガードじゃ」

「トリガーチェック、ヒールトリガー。パワーはキャノンギアに、そしてダメージ回復します」

「ダメージチェック。トリガーはなしじゃ」

「キャノンギアでワイズマンにアタックします！」

キャノンギアの攻撃でヒットしようとしていたが……

「オラクルガーディアン・ニケでガードじゃ」

ガードされ、攻撃は通らなかった。

「ターン終了です」

「ワシのターン、スタンド&ドローじゃ。CEOアマテラスにライ
ドじゃー」

CEOアマテラスにライドすると綾乃は思わず見惚れてしまう。

「あ、あんなユニットがいるなんて……」

「かわいいですよね」

「ええ」

綾乃の会話にエミが加わる。すると、エミはさらに詳しく話す。

「オラクルはミサキさんも使っているんですよ」

「ミサキさん……あの髪の長い人ね。強いのか？」

「はー」

綾乃とエミの会話の中、秀吉と愛莉のファイトは続く。

「アマテラスの効果で、山札上のカードをソウルに置き、山札の一番上をチェックし、上か下に置くのじゃ。これはこのままじゃ。そして、サイレント・トムにオラクルガーディアン・ジェミニ、お天気お姉さんみるくをコールじゃ」

次々とリアガードをコールしていき、攻撃に入る。

「みるくのブースト、アマテラスでヴァンガードにアタックじゃ。さらに、ワシの手札は2枚。ドライブチェックで手札が4枚になるため、アマテラスの効果で+4000し、さらにみるくの効果で+4000されるのでアマテラスのパワーは24000じゃ」

「に、24000……!!」

「やっぱアマテラス強いな……」

「ノーガードです」

「ツインドライブ。ファーストチェック、クリティカル・トリガーじゃ！クリティカル効果はアマテラスにパワーはサイレント・トムに。セカンドチェック、トリガーはなしじゃ」

アタックがヒットし、愛莉のダメージはこれで3となる。秀吉の猛攻はまだ終わらなかった。

「ジェミニのブースト、サイレント・トムでヴァンガードにアタックじゃ！」

「ノーガードです」

これで愛莉のダメージは4になる。

「これでダメージ4……。でも、これで攻撃は……」

「いや、まだプロミスがいる」

「プロミス・ドーターのアタックじゃ。プロミス・ドーターの効果で手札からオラクルシンクタンクを一枚捨て、パワー+5000じや」

パワーが上がり、これでパワーが14000となる。

「キャノンギアでガードします」

ガーディアンを呼び、ガードをする。攻撃は通らなかつた。

「ターンエンドじゃ」

「危ないな……」

「愛莉ちゃんのダメージはこれで4。次で決めないと確実に……」

「でも、まだわかりませんよ」

愛莉のターンとなる。

「私のターン、スタンド&ドロ。暴君デスレックスにライドします！ さらに餓竜ギガレックス、スカイプテラ、サベイジ・ウォー

リア、ソニック・ノアをコールします」

勝負を決めたいところ。愛莉は一気にリアガードをコールする。

「行きます！ スカイプレラのブースト、キャノンギアでヴァンガードにアタック！」

「サイキック・バードでガードじゃ」

「うう……。ソニック・ノアのブースト、デスレックスでアタック！」

「ノーガードじゃ」

「ツインドライブ、ファーストチェック、セカンドチェック……クリティカル・トリガー！ クリティカル＋1はデスレックスにそしてパワーはギガレックスに」

デスレックスの攻撃で秀吉のダメージは4にしかし、ギガレックスの攻撃だけではダメージ5のため、届かず。

結局、サイレント・トムに攻撃しただけで終わってしまった。

「ワシのターンじゃな。スタンド&ドロ。アマテラスの効果でソウルにおいてから山札の一番上を確認じゃ。これは下に置く。ワイズマンをコールしてから、アマテラスでアタックじゃ」

「ノーガードです……」

「ツインドライブ、ファーストチェック、セカンドチェック……ドロトリガーじゃ。効果はプロミス・ドーターに。そして一枚ドロ

「じゃ」

アマテラスの攻撃により、愛莉のダメージは5になる。そしてプロミス・ドーターの攻撃で結局、受けてしまい、負けてしまったのだった。

「ありがとうございました」

「うむ、こっちこそじゃ。いいファイトであったぞ」

お互い握手を交わし、それぞれのチームに戻っていく。

「やったね、秀吉」

「すごいよ、もうオラクルを使いこなすなんて」

「うむ、これも戸倉のおかげじゃ」

「私は別に何もやってないって」

そして、愛莉たちの方は……

「い、い、い……」

「いいよ。まだ一戦目だし」

「そうだよ。アイリーン、元気出して」

「次はひなたちゃんだね」

「ふっふっふ、ひなたちゃんが秘密兵器の一つだとはアキリンチー
ムはいまだに知らない……」

「京子ちゃん、怖いよ……」

次は第二回戦、雄二VSひなたである。

「袴田、手加減はしないぜ」

「おー。ひな、まけないよー」

お互い、デッキをシャッフルし、5枚カードを引き、準備が整ったところでバトルに入る。

「2人とも、準備できましたか？」

「おう」

「おー」

「それでは、第二回戦、坂本雄二君VS袴田ひなたちゃんのバトル、スタートです」

「「スタンドアップ、ザ・ヴァンガード！」」

この瞬間、ひなたのデッキがまさかのあのデッキだとはだれも予想していなかった……。

第一回戦 木下秀吉VS香椎愛莉（後書き）

今回は雄二VSひなたです。ただ、ひなたのデッキはみなさんとはまったく予想していたのと違うデッキを使います（笑）

第二回戦 坂本雄二VS袴田ひなた(前書き)

前回は少しわかりずらいところもありましたが、今回はちょっと改善します。ヴァンガードのプレイするところを書くのを初めてなもので……(汗)

第二回戦 坂本雄二VS袴田ひなた

第二回戦、雄二VSひなたのヴァンガードファイトが始まった。すると、ひなたのファーストヴァンガードはあれだった……。

「そ、それは……!」

「フルバウだよー」

フルバウと言えば、シャドウパラディン。ひなたの使用デッキはシャドウパラディンデッキだった。それを見たアイチやミサキたちは驚いてしまう。

「シャドウパラディン!？」

「なんであんな小さい子が……」

「ふっふっふ、こんなこともあるつかと、私がひなたちゃんにデッキを貸してやったのだー!」

「まったく」

智花がどうして京子がひなたにデッキを貸したのかアイチたちに説明する。

「ひなたはこの日までにデッキがなかなか完成できなくて、それで京子さんが作ったシャドウパラディンデッキを貸したんです」

「アイツが……」

「歳納京子、恐ろしいやつだぜ……」

アイチたちが驚く中、雄二はひるまず、ファイトに集中する。

「ふん、いくらシャドウパラディンでも相手は袴田だ！俺は負けねえぜ！」

そんな雄二のファーストヴァンガードはりザードソルジャー・コンロー。かげろつデッキである。最初は雄二のターンからとなる。

「俺のターン、ドロー！ 鎧の化身バーにライド！ コンローはりアガードサークルに移動してターン終了だ」

「ひなのターン、ドロー。ブラスター・ジャベリンにライド。フルバウの効果でブラスター・ジャベリンにライドしたとき、デッキからブラスター・ダークを手札に加えるよ」

デッキからブラスター・ダークを手札に加え、デッキをシャッフルする。

「やはり来たか、ブラスター・ダーク……！」

「そして、フルバウがソウルにいるから、ブラスター・ジャベリンのパワーは常に+2000でパワー8000。いくよ、ブラスター・ジャベリンでバーに攻撃」

鎧の化身バー 8000 VS ブラスター・ジャベリン 80

00

「ノーガードだ」

「おー。ドライブチェック、クリティカルトリガー。効果は全部ブラスター・ジャベリンに」

これでブラスター・ジャベリンのパワーは13000にそしてクリティカルは2になり、バーに攻撃がヒットし、雄二のダメージはこれで2となる。

「しよっぱなからクリティカルを引かれるとは思いませんでしたぜ……」

「ひなのターンはこれで終わりだよ」

「よし、俺のターン、ドロー！ ベリコウステイドラゴンにライドだ！ ここでコンローの効果を使うぜ。カウンターブラスト。コンローを退却し、デッキからグレード1以下のかげろうを手札に加える。俺はワイバーンガード・バリイを加える」

ワイバーンガード・バリイを手札に加えたら、デッキをシャッフルし、次のステップに入る。

「さらに、俺はバーをベリコウステイドラゴンの後列にコールし、左にはドラゴンナイト・ネハーレンをコールする。行くぜ！ バーのブースト、ベリコウステイドラゴンで攻撃だ！」

ベリコウステイドラゴン 17000 VS ブラスター・ジャベリン 8000

「おー。ここはつけるよ」

「ドライブチェック！ トリガーはなしだ」

攻撃がヒットし、ひなたのダメージは1となる。

「ここでベリコウステイドラゴンの効果を使わせてもらっぜ。自分のダメージゾーンの1枚を表にする。そして、ネハーレンでブラスター・ジャベリンに攻撃だ！」

ドラゴンナイトネハーレン 10000 VS ブラスター・ジャベリン 8000

「おー。これもつける」

この攻撃も受けて、ひなたのダメージはこれで2となる。これで雄二と並ぶ。

「俺のターンは終了だ」

「ひなのターン、スタンド&ドロー。いくよ、ブラスター・ダークにライド」

ブラスター・ダークにライドする。

「ブラスター・ダーク……！」

「やはり来たね」

アイチや明久たちも見守る中、綾乃はどうしてシャドウパラディンであんなに真剣なのか不思議に思う。

「な、なんでみんな真剣なのよ。それにシャドウパラディンってどんな効果を持つてるの?」

「綾乃ちゃん、見ればわかるで」

「ああ、ちゃんと見ておきな」

「えっと……」

その後も、ひなたのターンは続いていく。

「さらに、髑髏の魔女ネヴァンをコール。ネヴァンの効果で手札を一枚捨て、山札から2枚ドロ。そして暗闇の騎士ルゴス、ネヴァンの後列に黒の賢者カロンをコール。ブラスター・ダークでヴァンガードに攻撃」

ブラスター・ダーク 10000 VS ベリコウステイドラゴン 9000

「ノーガードだ」

「ドライブチェック、トリガーはなしだよ」

攻撃がヒットし、雄二のダメージは3となる。

「さらに、ルゴスでヴァンガードに攻撃」

暗闇の騎士ルゴス 10000 VS ベリコウステイドラゴン 9000

「ノーガードだ」

攻撃を受け、ダメージは4になる。すると、ドロートリガーが来る。

「よし、ドロートリガーだ。カードを一枚引き、パワーはベリコウステイドラゴンに」

ベリコウステイドラゴンのパワーは14000になる。これではネヴァンの攻撃は通らない。そのため、狙いをネハーレンに変える。

「おー。なら、カロンのブースト、ネヴァンでネハーレンに攻撃」

ドラゴンナイトネハーレン 10000 VS 髑髏の魔女ネヴァン 11000

「それはアイアンテイル・ドラゴンでガードだ」

攻撃は通らなかった。

「おー。ひなのターンは終わり」

「俺のターン、スタンド&ドロー！ 行くぜ、ドラゴニック・ウオーターフォウルにライドだ！」

ドラゴニック・ウオーターフォウルにライドする。

「さらに、ネハーレンの後列にバーをコールし、ここから攻撃だ。バーのブースト、ドラゴニック・ウオーターフォウルでヴァンガー

ドに攻撃！ この時、ウォーターフォウルの効果で+3000で21000だ！」

ドラゴニック・ウォーターフォウル 21000 VS プラスター・ダーク 10000

「おー。受けるよ」

「ツインドライブ、ファーストチェック、セカンドチェック、トリガーはなしだ」

攻撃はヒットし、ひなたのダメージは3になる。

「ネハーレンでヴァンガードに攻撃！」

ドラゴナイトネハーレン 10000 VS プラスター・ダーク 10000

「おー。ネヴァンでインターセプト」

ネヴァンのインターセプトによるガードで防がれる。

「これでターン終了だ」

「おー。ひなのターン、スタンド&ドロー。ファントム・プラスター・ドラゴンにライド」

ファントム・プラスター・ドラゴンにライドする。それを見て、誰もが息をのむ。

「来たね」

「うん」

「だ、だからなんでそんなに真剣になるのよ」

ただ一人、ヴァンガードを知らない綾乃はついていけず、ひなたのターンは続く。

「ネヴァンをコールして、効果を発動。手札一枚捨てて、カードを2枚ドロ」

「な、なんでファントム・ブラスターの効果を使わないの？」

「おー。まだまだチャージするの。ファントム・ブラスター・ドラゴンの後列にカロンをコールして、カロンのブースト、ファントム・ブラスター・ドラゴンでヴァンガードに攻撃」

ファントム・ブラスター・ドラゴン 19000 VS ドラゴ
ニック・ウォーターフォウル 10000

「残念だが、バリーで完全防御！ 手札のかけろを一枚捨てる」

「ツインドライブ、ファーストチェック、セカンドチェック、おー。クリティカルトリガー。効果はすべてルゴスに」

バリーによる完全防御で防がれるが、攻撃は続く。

「ルゴスでヴァンガードにアタック」

暗黒の騎士ルゴス 15000 VS ドラゴニック・ウォー
ターフォウル 10000

「これ受けたらまずいな、槍の化身ターでガードだ」

ターで防がれる。その後、ネヴァンでリアガードのネハーレンに攻撃し、ヒットする。

「ひなのターンは終わり」

「よっしゃ、俺のターン、スタンド&ドロー！ ここで決めさせてもらうぜ、バーの前列にドラゴニック・エクスキューショナー、そしてもう一体のエクスキューショナーもコールだ！ 準備は整ったぜ！ バーのブレスト、ウォーターフォウルでヴァンガードに攻撃！ さらに効果を使い、手札にあるグレード3のかげろつを一枚捨て、パワー10000アップだ！ これでパワーは31000だ！」

ドラゴニック・ウォーターフォウル 31000 VS ファン
トム・ブラスター・ドラゴン 11000

「うわ……雄二ってば小さい子相手に容赦なしだよ」

「權君に教わってるからね」

「グレード3ばかりだけど、デッキ事故ってたのか？」

「いいぞー、もっとグレード3出してー」

「森川……」

「おー。受けるよ」

「ツインドライブ、ファーストチェック、セカンドチェック、よし！クリティカルトリガー！クリティカルは当然、ウォーターフオウルに。そしてパワーは左前列のエクスキューションーに！」

攻撃がヒットし、ひなたのダメージはこれで5になる。

「バーのブースト、エクスキューションーでヴァンガードに攻撃だ！」

ドラゴニック・エクスキューションー 25000 VS ファ
ントム・ブラスター・ドラゴン 11000

「おー。マクリールで完全防御」

「な、なにに！？」

あっけなく、攻撃を防がれた。その後もエクスキューションーでルゴスを攻撃するも、それはネヴァンのインターセプトで止められた。

「た、ターン終了だ……」

「雄……」

「子供相手にムキになるから」

「おー。ひなのターン、スタンド&ドロー。ひなの切札」

「え!?!」

その言葉にアイチたちは驚く。

「ファントム・ブラスター・ドラゴンが切札じゃないの……?」

「おー。こっちだよー。ファントム・ブラスター・オーバーロードにライド」

ファントム・ブラスター・オーバーロードにライドする。それを見て誰もが驚く。

「ふあ、ファントム・ブラスター・オーバーロードまで持ってるの……!?!」

「はっはっはー! これがひなたちゃんの力よ!」

「あれ京子が作ったデッキだろ」

「ファントム・ブラスター・オーバーロードの効果で手札のファントム・ブラスター・オーバーロードを一枚捨て、これでクリティカル+1そしてパワー10000アップだよー」

ファントム・ブラスター・オーバーロードのパワーはソウルにファントム・ブラスター・ドラゴンがあるので+2000、そして、効果で+10000でパワーは23000となる。

「いくよー。カロンのブースト、ファントム・ブラスター・オーバーロードでヴァンガードに攻撃」

ファントム・ブラスター・オーバーロード 31000 VS
ドラゴニック・ウォーターフォウル 10000

「くそ……防げねえ……」

その後のツインドライブはトリガーはなかったが、攻撃はヒットし、雄二のダメージは6となり、勝負はひなたの勝利となる。

「勝者、袴田ひなたちゃん」

「おー。ひな勝ったー」

「負けた……」

2人ともそれぞれのチームに戻っていく。

「やったねー、ひなたちゃん」

「おー。きょーこおねーちゃん、デッキありがとー」

「うん、どういたしまして」

ひなたは嬉しそうに京子に使ったデッキを返す。

「しかし、シャドウパラディンなんてよく集められたな」

「いやー、私の努力の結果ですよー。結衣さん」

「はいはー」

そして、雄二は……

「すまん……」

「子供相手にムキになるからだよ」

「んなこと言われてもアイツがシャドウパラディン使ってくるなんて聞いてねえぞ」

「まったくじゃな」

「次は……」

「……………（スック）」

「ムツツリーニだね」

「よし、負けないぞー」

第三回戦のムツツリーニと真帆が前に出る。お互い、デッキをシヤッフルし、5枚カードを引き、準備が整ったところでバトルに入る。

「2人とも、準備できましたか？」

「……………（コク）」

「いつでもオツケーだよ」

「それでは、第三回戦、土屋康太君VS三沢真帆ちゃんのバトル、

スタートです」

「……（スタンドアップ、ザ・ヴァンガード！」

第二回戦 坂本雄二VS袴田ひなた（後書き）

今回はうまくかけてるかちょっと心配です……（汗）

バカとイメージと先導者は明日更新します。

第三回戦 土屋康太VS三沢真帆(前書き)

今回初となるむらくもが登場します。

むらくもはWikiで効果を見て書いています。

第三回戦 土屋康太VS三沢真帆

真帆のファーストヴァンガードはメカ・トレーナー。ムッツリーニは忍獣イビルフェレットである。

「む、初めて見るユニットだな」

「土屋さんはむらくもか」

「ぬばたまと対するクランだったね」

「真帆ちゃんはスパイクブラザーズか……」

「いったいどんなファイトになるんだろ……」

さっそく、ムッツリーニのターンで静寂の忍鬼シジママルにライドし、イビルフェレットは右後列のリアガードサークルに移動させ、ターンを終了させた。

「よし、アタシのターン！ ワンダー・ボーイにまほまほライド！」

ワンダー・ボーイにライドさせ、メカ・トレーナーを左後列のリアガードサークルに移動させてから、ヴァンガードに攻撃する。

トリガーはなしだが、ムッツリーニのダメージは1となる。

「……………俺のターン、忍竜カードブレスにライド。イビルフェレットの効果で山札の下に置き、手札から双剣士MUSASHIを左前列にコールし、さらにシジママルをMUSASHIの後列にコール」

「いきなりグレード3を……」

「……カーストブレスでヴァンガードにアタック」

「ここはノーガード」

「……トリガーチェック。トリガーはなし」

「ダメージチェック、クリティカルトリガー。効果は全部ワンダー・ボイに」

「……カーストブレスの効果、ヴァンガードにヒットした時、山札の上から5枚めくり、その中から隠密魔竜マンダラロードがあれば手札に加える。あった」

マンダラロードがあったので手札に加える。

「……シジママルのブースト、MUSASHIでアタック。効果でMUSASHIのパワーは+3000」

真帆にとっては初めて対戦するむらくもに戸惑うばかり。それでもバトルスタイルを崩すことなかった。

「ジャイロプリンガーでガード」

ガードされ、攻撃は通らず。真帆のダメージは1でムッツリーニのターンは終了した。

「アタシのターン、スタンド&ドロ！ 至宝ブラックパンサーに

まほまほライド！ さらにハイスピードブラッキーをメカ・トレーナーの前列にコール！ ブラックパンサーでヴァンガードにアタック！

「……………ノーガード」

「ドライブチェック、クリティカルトリガー！ クリティカルはパンサーに、パワーはハイスピードブラッキーに」

「……………ダメージチェック、ドロートリガー。1枚ドロして、パワーはカーズドブレスに」

「なら、メカ・トレーナーのブースト、ハイスピードブラッキーでカーズドブレスにアタック！」

「……………ノーガード」

攻撃を受け、ムッツリーニのダメージは3になる。

「ターン終了」

「……………俺のターン、隠密魔竜マンダラロードにライド」

先ほど手札に加えたマンダラロードにライドする。

「むむ、来たな。マンダラロード」

（真帆ちゃん気を付けて。マンダラロードは……………）

結衣が心配する中、ムッツリーニはリアガードをコールする。

「……………シジママルの前列にMUSASHI、マンダラロードの後列にシジママル、忍獣ブラッディミストを右前列にコール」

さっそく、バトルに入る。

「……………シジママルのブースト、マンダラロードでヴァンガードにアタック」

「ノーガードだよん」

「……………ツインドライブ、ファーストチェック、セカンドチェック、クリティカルトリガー。クリティカルはマンダラロードに、パワーはMUSASHIに」

「ダメージチェック、1枚目、2枚目。ドロートリガー。1枚ドロし、パワーはパンサーに」

その後、MUSASHI、ブラッディミストで攻撃が続き、真帆のダメージは4となる。

「……………ターン終了」

「アタシのターン、スタンド&ドロ。ツッチーニ、このターンで終わらせてもらうよ！ 將軍ザイフリートにまほまほライド！」

ザイフリートにライドされる。

「さらに、メカ・トレーナーのカウンターブラスト！ 山札からグレード1以下のスパイクブラザーズを1枚手札に加える。ダッドリ

ー・ダンを加えそのままザイフリートの後列にコール。さらに、ブラッキーの後列にワンダー・ボーイをコール！ ワンダー・ボーイのブースト、ブラッキーでヴァンガードにアタック！ さらに効果を使い、パワー+5000！」

22000という高いパワーにたいしてムッツリーニはノーガードし、攻撃を受ける。ブラッキーは効果で山札に戻る。

「よし、ダッドリー・ダンの効果！ カウンター・ブラスト！ さらに、手札1枚をソウルに置き、ブーストした時、山札からスパイクブラザーズをコールする！ ジャガーノート・マキシマムをワンダー・ボーイの前列にコール！ そして、ダッドリー・ダンのブースト、ザイフリートでアタック！」

「……………忍獣リリースミラージュで完全防御」

「ぐぬぬ……………」

ツインドライブの結果、クリティカルトリガーが出て、効果は全部ジャガーノート・マキシマムに。

「これで終わりだよ！ ワンダー・ボーイのブースト、ジャガーノート・マキシマムでアタック！ さらに効果を使い、パワー+5000！」

ジャガーノート・マキシマムのパワーはトリガー、効果、ブーストで29000に。しかし、ムッツリーニは表情を変えず、冷静だった。

「……………マンダラロードの効果、ガード開始時にカウンター・ブ

ラストで手札のマンダラロードを捨て、アタックしているユニットを選び、パワー・10000」

「ええ!?!」

「…………ミダレエッジでガードし、ブラッディミストのインターセプト」

効果によるパワーダウン、さらなるガードで攻撃が防がれてしま
う。

「ええー!?! そんなのありなの!?!」

ジャガーノートは山札に戻してから真帆のターンは終了する。

「…………俺のターン。MUSASHIを右前列、ミダレエッジをMUSASHIの後列にコール。バトル。ミダレエッジのブースト、MUSASHIで攻撃」

「の、ノーガード…………」

攻撃は受け、ダメージトリガーはなかった。

「…………シジママルのブースト、マンダラロードでヴァンガードにアタック」

「そ、それは…………サイレンス・ジョーカーとソニック・ブレイカーでガード!」

真帆の手札も4枚になり、ガードしていく。

「……………ツインドライブ、ファーストチェック、セカンドチェック、スタンドトリガー。右前列のMUSASHIをスタンドさせ、+5000」

「うっ……」

手札は4枚だが、真帆の焦りの顔が出てきてしまっている。ムツツリー二の攻撃は続いていく。

「シジママルのブースト、MUSASHIでアタック」

「の、ノーガード……」

「ええ！？ どうして……!?!」

攻撃を受け、ダメージは6枚目。勝ったのはムツツリー二だった。

「勝者、土屋康太君」

「……………(ガッ)(」

「む、無理だよ……」

真帆の手札を見てみれば、全部がグレード1。これでは防ぎようがなかったようだ。両社はチームに戻っていく。

「いじめんね、ゆいにゃん、きょーたん……」

「いいよ。真帆ちゃんも頑張ったよ」

「そうだよ」

「次は私ね。真帆の分も頑張ってくるから」

そしてムツツリーニは

「やったね、ムツツリーニ」

「……………（コク）」

「それにしても、僕たちが後半で相手する娯楽部だっけ。なんだかあの子たちよりも強い気が……………」

「アイチ……………？」

「では、次は私ですね」

「瑞希、頑張つてね」

「はい」

さっそく瑞希と紗季は前に出て、ファイトの準備をしている。F Vを置き、デッキをシャッフルしてからデッキから5枚手札に加え、引き直しをした後、バトルに入る。

「2人とも準備はできましたか？」

「「はい」」

「それでは、第四回戦、姫路瑞希さんVS永塚紗季ちゃんのバトル、スタートです」

「スタンドアップ、ザ・ヴァンガード！」

第三回戦 土屋康太VS三沢真帆（後書き）

むらくもの立ち回りはこんな感じで書き上げました。

自分の考えたむらくもで書いていますのでむらくもは人それぞれか
もです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9851z/>

～ 双剣覚醒発売記念企画～ バカとイメージと先導者VSゆるい口ウきゅーぶ

2012年1月6日00時48分発行